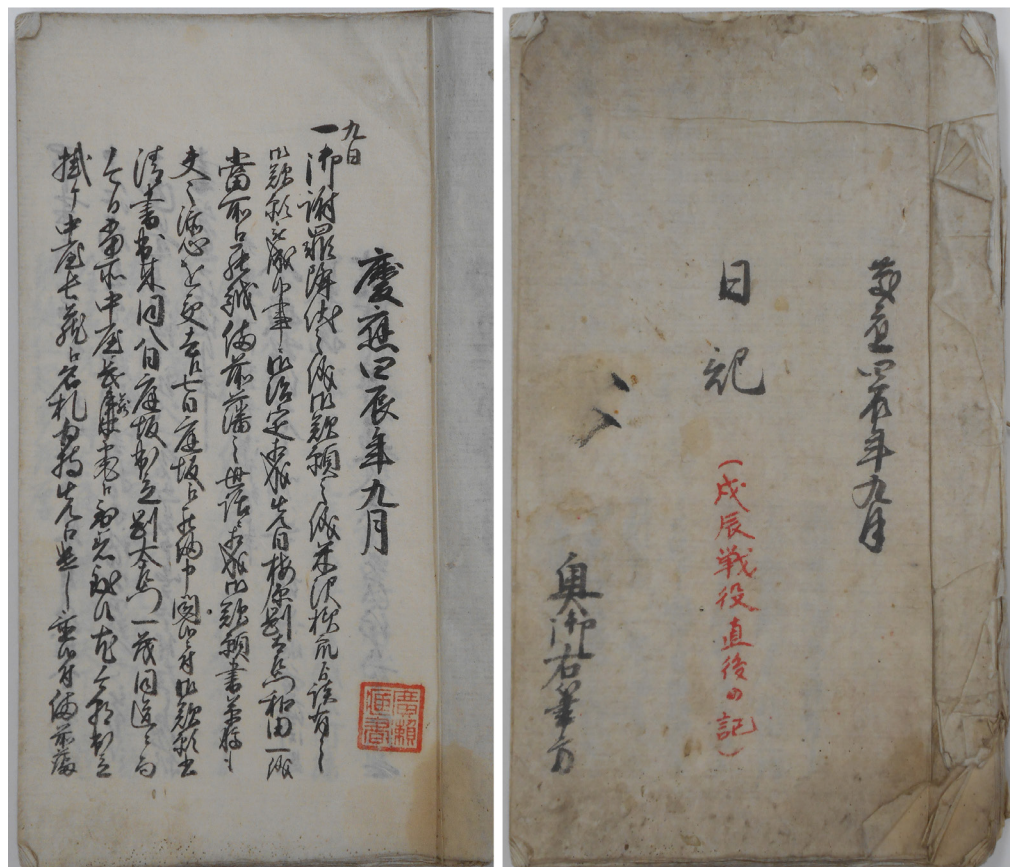


福島県史料情報

第51号 平成30年(2018)6月



日記(広瀬静樹家文書(その1)52)

戊辰戦争期の二本松藩と「広瀬静樹家文書」

明治元年(一八六八)九月二十二日の鶴ヶ城落城に前後して、奥羽越列藩同盟に参加した諸藩の降伏が相次ぎ、本県域における戊辰戦争は終焉を迎える。

二本松藩少参事(知事・大参事・権大参事に次ぐ役職)広瀬正安の手許に残された奥右筆方の「日記」(写真)によれば、二本松藩が正式に降伏嘆願書を提出したのは、明治改元の翌日の九月九日のことであつた。

これを機に、各地で戦闘を続けていた藩士たちの帰国が進み、武装解除が行なわれていく。たとえば、九月十九日条には、「西洋小銃」四三七挺・「和小銃」一三三挺・「弓」五十張・「鎗」三十五筋・「長刀」十二振を新政府軍に「上納」したという記載がみられる。

一方、藩主の丹羽長国は二本松城下の大隣寺に謹慎し、改めて新政府からの沙汰を待つこととなつた。最終的には新藩主長裕のもとでの存続が認められたものの、日記には、領内が他藩の支配下に置かれる(九月二十六日条)など、敗戦藩を取り巻く危うい状況がつぶさに記載されている。

結局のところ、県内諸藩の多くは減封・転封を命じられたが、すぐさま消滅したわけではなかった。正安らは、明治四年の廃藩置県で藩という存在そのものが廃止されるまで、引き続き統治者として藩の再建と領内の復興に取り組んでいくのである。しかし、石高が半減し、多くの人材が戦死した同藩にとって、その道のりは厳しいものであつた。

「広瀬静樹家文書」からは、戊辰戦争において二本松藩と藩士たちがたどった数奇な運命をうかがうことができる。戊辰一五〇年にあたり、改めて注目をいただきたい史料群である。

(山田 英明)

越後「五ヶ浜大工」 阿部政蔵の足跡

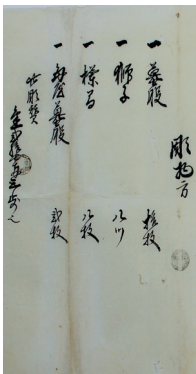
越後国の主に沿岸部集落から働きに出た「越後大工」は、東北・北関東等で民家・寺社建築を手掛け、近世・近代期に活躍した。特に蒲原郡五ヶ浜村（現新潟県新潟市西蒲区）の「五ヶ浜大工」は有名で、元治元年（一八六四）刊『越後土産 初編』でも名産物に挙げられている。本稿では、五ヶ浜大工の名棟梁、阿部政蔵（証蔵）に関する史料に注目した。

阿部政蔵は文化十三年（二八一六）五ヶ浜村に生まれ、江戸で修行後、彫刻を後藤源治に学び、弘化年間に那須郡馬頭村（現栃木県那珂川町）に居を構え、優れた技巧で名声を得たと伝わる。各地から彼に声が掛かる中、安政四年（一八五七）に伊達郡長倉村（現伊達市）名主伴右衛門が、焼失した鎮守牛頭天王宮（現八雲神社）拝殿造営を依頼している。

安政四年五月「覚（牛頭天王宮拝殿再建）」（庄司家文書Ⅰ三三三四）は、依頼を受けた阿部政蔵が伴右衛門へ差し出した造営請負の念書である。手付金十両を受け取る旨、当月二十九日に取り掛かり来年五月に完成させる旨、見積りを出す旨が記されており、見積り明細は次の通りである。「組立方」は、平六間半×妻

二間半の惣檼柱造、外側は二手先斗栱、妻虹梁に菊渦彫、二重虹梁に渦若葉彫、屋根は流破風、鬼板・箱棟等の仕様で人足一二〇〇人。「造作方」は、唐戸六枚折、格子戸四枚、羽目四間、敷居・鴨居・長押等の仕様で人足三七三人。「彫物方」は、墓股十枚、獅子鼻八つ、欄間八枚、母屋墓股二枚の仕様で彫費二十七両余。総計は金八十三両余で、扶持米八十三俵余と枋葺料十両位等を加除している。見積りからは、棟梁としての阿部政蔵の仕事ぶりを窺い知ることができ、なかでも彫物は阿部政蔵等の巧者が担当したとみられる。

造営費は長倉村の村民にとつて大きな負担となったが、一部に摺上川の揚金を充て捻出された。予定通り牛頭天王宮拝殿は落成し、八雲神社献額絵馬には当時の拝殿の様子が伝わる。村民はその出来に満足し、阿部政蔵の腕の良さを認めたとみられ、慶応元年（一八六五）には同村の福源寺檀家が、同寺再建を再び彼に依頼している。その後、阿部政蔵は明治二年（一八六九）没したと伝わるが、福島・栃木・新潟県に多数の寺社建築を遺した。（小野 孝太郎）



覚（牛頭天王宮拝殿再建、彫物方部分）

戊辰戦争期の会津領絵図と 会津への関心

慶応四年（一八六八）四月、仙台国分町十九軒の書林・裳華房が左の絵図を出版した。絵図は右下を北にした構図で、周囲の黒色太線は陸奥国等の国境を示し、黄色小判に郡名を記す。その表記から陸奥国会津・耶麻・河沼・大沼郡、同国信夫・安達・安積・岩瀬郡の一部等が範囲で、戊辰戦争期の会津領等を描いている。

凡例は無いが、朱色四角は政庁や城を示し、「若松」「猪苗代」「福島」「白川」「米沢」「新發田」等を表示している。また、朱色上塗り破線は街道で、若松から延びる米沢・土湯・二本松・白河・下野・沼田・越後街道に加え、奥州街道や六十里越・八十里越も描いている。街道沿いには宿



〔会津領并奥州街道筋絵図〕（個人蔵）

駅・集落名が記載され、周囲に「岳ノ湯」「甲子湯」や「古城（白岩城または長沼城）」「土津社」「柳津（円蔵寺等）」も見られる。なお、白河街道沿いのみ詳細な里程を、檜原・壺下・三代・赤谷（現北塩原村・猪苗代町・郡山市・新潟県新発田市）のみ会津藩口留番所の表示がある。

そして、川・湖には青色を用い、阿賀野川・阿武隈川水系が描かれ、前者は「忠見川（只見川）」「小セ沼（尾瀬沼）」「ツル沼川」「猪苗代湖」が記されている。さらに、山には緑色を用い、「飯豊山」「磐梯山」「高ソ子（高曽根山）」「西アヅマ」「布引山」「高原峠」「火打岳」「御神樂岳」等の情報が詳細に描かれている。

以上の情報や位置関係等の表現方法は、「道中案内図」と明らかに異なり、「国絵図」や『国郡全図』に近い。また、会津領に加え奥州街道筋を描く点や、前述の口留番所・白河街道の情報は特徴的で、ここに時代背景が垣間見られる。出版当時、仙台藩は奥羽鎮撫総督（新政府軍）の命に応じ、会津藩と土湯で対峙した時期である。仙台城下の大手書林・裳華房は、藩の情勢と庶民の会津への関心を意識した上で、新政府軍・会津藩の行軍ルートと予測される、奥州・白河街道筋等や拠点に注目し、詳細な情報を描き込んで頒布したのであろう。（小野 孝太郎）

県庁文書に記された 世良修蔵暗殺の顛末

慶応四年（一八六八）閏四月十九日夜、長州藩士で奥羽鎮撫総督府参謀の世良修蔵は宿所の福島城下金沢屋において仙台藩士らに急襲され、捕らえられた。世良は客自軒（かくじけん）の庭で取り調べを受け、二十日には阿武隈川畔で処刑された。これが一因となり、東北の戊辰戦争が非和解的なものに突き進むことになった。

ところで、この事件の舞台となった福島町十四町目の金沢屋主人斎藤浅之助の具体的な証言が、『殉国者調書』という福島県の公文書のなかに残されている。それは、明治九年



明治 9 年 7 月 1 日付斎藤浅之助書状
(明治・大正期の福島県庁文書 1707)

（一八七六）七月一日付で斎藤から旧福島県参事山吉盛典に出されたもので、次のように記されている。

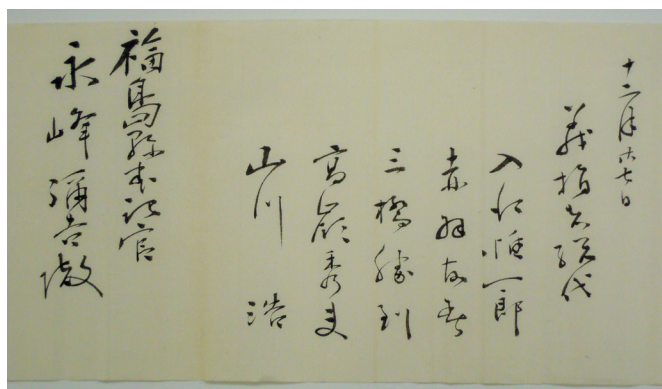
明治元年三月に奥羽鎮撫総督九条道孝が会津征討を命じ、私の金沢屋も次第に各藩から宿陣を仰せ付けられ、閏四月十日頃に副総督の醍醐忠敬や世良修蔵などが宿陣しました。間もなく彼らは安達郡本宮付近へ出發し、十九日の五時に世良と長州藩士勝見善太郎が引き上げてきて、再び手前どもの金沢屋へ宿泊いたしました。その夜の十時頃だったかと思いますが、仙台藩士たちが大勢押し入って大変な騒動になったのです。私は幼かったため、祖母を含めて家中の者を引き連れて隣の家へ逃げ去りましたので、その後のことは存じ上げません。漸く夜明け頃になって皆で戻ってみると、座敷や二階は散乱していて、誰もいませんでした。少しづつ他の人に様子を尋ねたところ、二十日の朝には世良と勝見は殺害され、その亡骸は腰浜村下川原にありました。私どもが手を付けることは禁じられていましたので、ただ最寄りの寺で仏事を営み、位牌は密かに持仏堂へ安置いたしました。その秋には戊辰戦争も終結し、世良の身内の方々もいらつしやって香典を頂戴いたしました。また、政府より今後の祭祀料として金百円を下賜されました。

（渡邊 智裕）

山川浩が取りまとめた 磐梯山噴火の義捐金

明治二十一年（一八八八）七月十五日の磐梯山噴火の報に接した在京の会津人山川浩・高嶺秀夫・三橋勝到・赤羽友春・入江惟一郎ら五人が発起人となり、七月二十五日付「東京日日新聞」紙上など数回にわたって「告会津人」と題した義捐金募集の広告を載せた。

これに直接関係する史料が、『磐梯山噴火義捐金』という福島県の公文書のなかに綴られている。その史料は、暮れも押し迫った同年十二月



明治 21 年 12 月 27 日付山川浩等連署書状
(部分、明治・大正期の福島県庁文書 1515)

二十七日付の達筆な手紙で、差し出し人は「告会津人」に名を連ねていた山川浩ら五人である。山川らは、新聞紙上で募った義捐金三百九十一円三十八銭（三井銀行為替券）に義捐者名簿二冊を添え、福島県書記官永峰彌吉を通して福島県へ寄付を申し入れている。当時の山川は東京高等師範学校長で、高嶺は山川を補佐する同校の教頭であった。

この義捐金に対する福島県知事山田信道の丁寧な礼状は、起案・決裁を経て明治二十二年正月九日付けで出されている。

義捐者名簿は、甲と乙の二冊からなり、甲には会津地方ゆかりの人々四百七十一名が載せられ、義捐金三百二十八円七十八銭の内訳が記されている。また、乙には子爵井上英之ほか東京高等師範学校寄宿生など会津人以外の四十一名が記され、義捐金六十二円六十銭の明細が載せられている。山川らの要請をうけ、福島県は会津人以外の人々に対しては一人ずつ領収証を発行した。

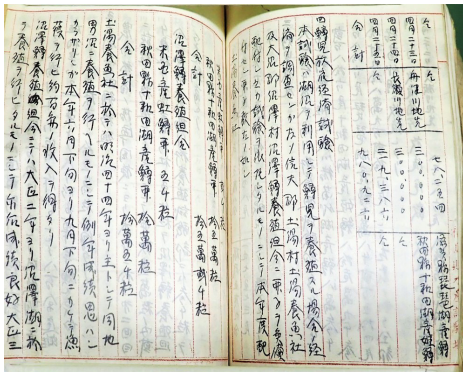
義捐者名簿には、山川健次郎・広沢安任・秋月胤永（梯次郎）・南摩綱紀・海老名季昌ら旧会津藩士の名前も多く見受けられる。戊辰戦争から二十年という歳月が流れ、当時の置かれた境遇こそ異なるが、彼らはいま故郷会津にできることをなしたのである。

（渡邊 智裕）

沼沢湖のヒメマス、 大正期の移植

ヒメマスは、ベニサケの陸封型の魚で、日本では北海道の阿寒湖・チミケップ湖に野生種が生息しており、明治二十七年（一八九四）に阿寒湖から支笏湖に移植されて以降、全国各地の湖に移植されてきた。福島県では、大正時代初めから、猪苗湖・桧原湖・秋元湖・沼沢湖（当時は沼沢沼とも呼称）等に移植が試みられたが、移植が成功し、現在でも水産資源として活用されているのは金山町沼沢湖のみである。

当館収蔵の『水産 免許漁業 漁業組合 水産試験場』（明治・大正期の福島県庁文書三〇二四）に、沼沢湖へのヒメマスの移植記録が残されているので紹介したい。



「福島県水産試験場 鱒児放流経済試験」
（明治・大正期の福島県庁文書 3024）

移植は、福島県水産試験場の大正四年度養殖試験事業の一部である鱒児放流経済試験として実施された。試験には、土湯村土湯養魚社と沼澤村沼澤鱒養殖組合の二団体が選ばれ、沼澤鱒養殖組合には米国産ニジマス卵五千粒・秋田県十和田湖産マス卵十萬粒が配付された。この組合は、大正二年（一九一三）からマスの養殖を始めた。そして、大正三年に放流した北海道西別川産マスの一部八百尾余りが、翌年に孵化場付近に遡上し、十五萬粒の卵が得られたとの記載がある。

大正二年に北海道西別川の虹別事業所から福島県にカラフトマスの発眼卵五十萬粒が送付された文書が、現在も北海道に残されていることから（野川秀樹「さけますす人工孵化放流に関する古文書の紹介（2）」SALMON 情報 No. 10（二〇一六））、養殖開始時の魚はカラフトマスであった可能性がある。十和田湖産マスについては、当時の養殖実績からヒメマスと推定できる。

明治十年以降、米国産のニジマス等マス類の移植事業が、内水面漁業資源の確保を目的として、国の指導により各地の自治体で盛んに行われてきた。生息環境に適した沼沢湖などの湖には、百年後の現在でも、移植された魚たちが累々と息づいている。（藤谷 誠）

平成三十年度行事予定

（平成三十年七月～平成三十一年三月）

一、展示公開

戊辰五十年「村人たちの戊辰戦争」

当館収蔵資料の中から、戊辰戦争に関する史料を展示し、地域社会の人々が戊辰戦争にどのように関わったのかを振り返ります。

【会期】八月十九日（日）まで

【解説会】七月二十八日（土）、八月十八日（土）。午後一時から。
只見線復旧応援

「奥会津の古文書」（仮）

三島町・昭和村の古文書の中から、村絵図、巡見使、検地帳、地誌、漆、蠟、農書、災害、交通、寺社、戊辰戦争などに関する史料を展示し、山村の生活実態を見ていきます。

【会期】九月八日（土）～十二月二十四日（月）

【解説会】九月十五日（土）、十月二十日（土）、十一月十七日（土）、十二月十五日（土）。午後一時から。

「新公開史料展」

『福島県歴史資料館収蔵資料目録』第四十九集に収録された「森山区有文書」等の中から代表的史料をご紹介します。

【会期】平成三十一年一月十九日（土）～三月二十四日（日）

【解説会】一月二十六日（土）、二月十六日（土）、三月十六日（土）。午後一時から。

歴史資料館移動展

「村人たちの戊辰戦争」

【会場】県立図書館展示コーナー

【会期】十一月二日（金）～十二月五日（水）（予定）

二、フィルム上映会

日本の歴史や風土、民俗芸能、伝統文化に関する記録映画を上映します。参加費無料、申込み不要です。

【会場・時間】とうほう・みんなの文化センター（県文化センター）視聴覚室。各回とも午後一時より。

第二回上映会 八月二十五日（土）

「蒔絵 室瀬和美 時を超える美」、「埼玉の戦国城館跡」、「富岡の唐傘 行灯花火」

第三回上映会 十月二十七日（土）

「春よ来い」、「加賀藩史料の宝庫」、「森のくらし第十五章 漆蠟」

福島県史料情報

第 51 号 平成 30 年 6 月 25 日

編集・発行

公益財団法人 福島県文化振興財団

福島県歴史資料館

〒960-8116 福島市春日町5-54

TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195

URL <http://www.history.fcp.or.jp>

E-mail history@fcp.or.jp